

## 第7章 人を人にすることが できる最後の砦を 「チーム学校」で守る

私が小中学生だった頃は昭和40年代から50年代ですが、今言われるような不登校やいじめなどの学校不適応問題は記憶にありません。また、通常学級における「気になる子」の問題も今のように大きく注目されたという記憶もありません。もちろん、地域差もあったのかもしれませんが、子どもだった私には気づかなかっただけなのかもしれません。

私は、これら現代の喫緊の課題ともいえる悩ましき問題の根には、子どもの「かかわりの力」不足があるのではないかと考え、その力の育成に研究と実践の軸足を置いています。

「かかわりの力」不足は、子どもに原因があるというわけではありません。子どもを育む周囲の環境が以前とは大きく様変わりしてきている現代社会において、「かかわりの力」が育ちにくいのは当然であり、むしろ子どもがかわいそうに見えることがあります。

子どもたちが大人になり、やがて来る未来を笑顔で迎えるために、学校・教師は何をすべきか、何ができるのか…。

本書ではここまで、私のこれまでの実践・研究からいろいろな理論や技法を紹介してきましたが、最後の章では、現代の子どもと学

校像についての私の考えをお伝えします。



## 現代の子ども像と支援の基本方策

みなさんが今、目の前にしている子どものなかに、ほめても認めても、「どうせ僕なんか…」「どうせ私なんか…」と自分を卑下するような言葉を日常的に発する子がいませんか？ そうした子どもは「自分に自信がない」「自分にOKと言えない」など、自尊感情が低い子どもたちといえます。

一般的に、大人も子どもも自分にOKと言えなければ他者にはなおさらOKと言うことはできません。また、自分を大切にできなければ他者を大切にすることはなおさらできないでしょう。

このように低い自尊感情の問題が、他者を攻撃する（いじめ）状況、他者から離れていく（不登校）状況を生むことが十分に推測されます。

さらに、みなさんがかかわる子どものなかに、口を開けば「うざい」「死ね」「ぶっ殺す」などの暴言を繰り返す子はいませんか？ そうした子どもは、他者とスムーズにかかわる技術・コツ・方法を知らない、あるいは間違っ身につけてしまっている、すなわちソーシャルスキルが乏しい子どもといえます。

日々、集団活動が展開される学級がそのような子どもたちであふれたら、そこにはいじめや不登校などの不適応状況に陥る子どもが出てくるのは当然ともいえます。

「低い自尊感情」と「乏しいソーシャルスキル」、私は現代を生きる子どもたちのなかに、そうした姿を示す子どもが増えてきている

と感じています。そして、その原因の1つとして、家庭や地域における「かかわり」の量的不足が強い影響を及ぼしていると考えています。

一昔前を想定し、両親、祖父母、子どもによって構成される5人家族を考えてみましょう。「ほめ」も「叱り」も含め、1人の大人が1日10回、子どもに言葉をかけるならば、子どもは毎日シャワーのように40回もの言葉を受けることになります。「ほめ」や「認め」の言葉により、子どもの自尊感情は少しずつ高まるでしょうし、「教え」「ほめ」「叱り」などの言葉により、子どものソーシャルスキルも少しずつ身についていくのではないのでしょうか。しかし、3世代同居世帯の減少、核家族・一人親世帯の増加傾向を示す現代の家庭では、子どもにかけられる「言葉のシャワー」量が少ないがゆえ、子どもの自尊感情もソーシャルスキルも育ちにくくなってしまっているのではないかと考えています。

同様に一昔前を想定し、隣近所の家庭状況やお互いの顔がわかっている地域を考えてみましょう（私の故郷はそういう地域でした）。「おまえは家の手伝いをしているのか？ えらいぞ」「朝の挨拶はもっと大きな声でしなくちゃダメだ！」等々、温かな「ほめ」や「叱り」の言葉を受けながら、どれだけ地域の大人に自尊感情やソーシャルスキルを育ててもらったかと思うと、感謝の気持ちが湧いてきます。しかし、隣近所とのつながりが薄れ、お互いの顔もわからなくなっている現代の多くの地域では、子どもにさまざまに声をかけたくとも、なかなか声をかけられないという大人がほとんどといえるのではないのでしょうか？

家庭同様、地域でも子どもにかけられる「言葉のシャワー」量が

少なくなり、子どもの自尊感情とソーシャルスキルが育ちにくい。現代の子どもたちがかわいそうに思えます。

このような現代の子どもたちの置かれている状況を鑑みれば、支援の基本方策は明らかです。子どもにかかわる大人が知恵を絞り、総力を挙げて、かかわる子どもの自尊感情とソーシャルスキルを育むということに尽きる…。教師37年、親31年という長い時間をかけて子どもにかかわり続けてきた私の「現在地」です。



## 学校は人を人にする事ができる最後の砦

前述のとおり、家庭・地域状況が変化してきている現代社会においても、昔同様に変わらぬ「集団」という資源が担保されているのが学校・学級です。「人が人になるには人が必要」「人とのかかわりのなかで本当の意味での人になる」と私は思っています。

現代の子どもを語るキーワードとして述べてきた「自尊感情」と「ソーシャルスキル」の2つは、どちらもかかわりを通して育まれるものです。あえて強い言い方をするならば、かかわりを通してしか、自尊感情もソーシャルスキルも育むことはできません。本を読み、頭で理解しただけでは、高まったり身についたりする類いのもではありません。「畳の上の水練」をいくら繰り返しても泳げるようにならないのと同じです。

そのように考えたとき、私たち教師は日々、さまざまな「川」に子どもたちを連れていき、実際の「水練」を行うことができます。はじめは緩やかな流れの「川」、次第に速い流れの「川」での「水練」を行うことで、子どもたちはやがて見事な「泳法・泳力」を身